

視覚障害幼児の社会的発達について

齊藤和良・中田英雄・佐藤泰正

I 問題

1935年に Doll, E. A. が Vineland Social Maturity Scale として社会生活能力の測定・尺度化の試案を発表して以来, この方面の研究はかなりの進歩をみせてきた。その後, Doll の案を骨子として社会生活能力テストも数種作成されるにいたっている(佐藤 1959)。

ところで, これらのテストを視覚障害児にはじめて行ったのは McKay, B. E. (1936) である。McKay は就学前の盲児数名に対して Doll のテストを実施し, 盲児の社会成熟度指数は平均60位ということであり, 失明時期が早いほど社会性の発達がおくれるということのべている。また Bradway, K. P. (1937) は他の特殊児童との比較を行い, その結果, 盲児の社会成熟度指数平均62という数字を出している。もちろん正眼児を指数100とした場合に盲児ははるかに劣っていたが, ろう児の平均指数80よりも低かった。さらに盲児の社会成熟度指数は年齢が増加するにつれて減少することが指摘されている。

さらに Doll の社会成熟度検査を視覚障害児に適用しようとする試みもいくらかの人々によってなされてきた。その1つに Maxfield, K. E. et al. (1942) による盲幼児用社会成熟度検査がある。このテストは本質的な面において Doll のテストと変りはなく, ただ視覚に直接間接的に関係する項目について代る問題が考えられている。この社会成熟度検査は佐藤 (1956) によって日本にも紹介されている。

佐藤 (1959) は, 先に7~12歳までの盲児・弱視児の社会成熟度についての研究 (Vineland Scale を骨子とした社会成熟度を用いている) を報告したが, 本研究では4~6歳までの視覚障害幼児の社会成熟度について報告する。

II 方法

本研究で用いた社会成熟度診断検査 (鈴木 1961) は,

第1部が社会生活能力であり, 6領域120項目から成り立っており, 第2部が基本的習慣で5領域60項目から成り立っている。各領域の構成及び内容は次のとおりである。

第1部 社会生活能力 (Social Competence)

- (1) 仕事の能力 (Occupation) ……日常生活の簡単な仕事がどの程度できるかどうかを測定する。20項目
- (2) からだのこなし (Locomotion) ……からだをどの程度, 自由に動かして思うところへ移動させることができるかどうかを測定する。20項目
- (3) ことば (Communication) ……ことばや文字によって, 他の人とどの程度, 意志の交流ができるかを測定する。20項目
- (4) 集団への参加 (Socialization) ……社会的集団生活に参加し活動することがどの程度できるかを測定する。20項目
- (5) 自発性 (自主性) (Spontaneity) ……自ら進んで, 責任をもって行動がどの程度できるかを測定する。20項目
- (6) 自己統制 (Self-control) ……わがままをおさえ, 忍耐強く自己の行動を統制することがどの程度できるかを測定する。20項目

第2部 基本的習慣 (Fundamental Habit)

- (7) 清潔・排泄
 - ㊦ 清潔 ……身のまわりをきれいにする習慣がどの程度できているかを測定する。10項目
 - ㊧ 排泄 ……大便と小便についての能力と自主の程度を測定する。10項目
- (8) 着衣・睡眠
 - ㊦ 着衣 ……衣服を着せたり, 脱いだりする習慣がどの程度できるかを測定する。10項目
 - ㊧ 睡眠 ……睡眠についての自立の習慣がどの程度できているかを測定する。10項目
- (9) 食事 ……食事をする能力とその正しい習慣がどの程度形成されているかを測定する。20項目

以上の質問項目について調査研究を行った。

テストは直接本人に対してでなく、日頃本人によく接している人（これを情報提供者というが、具体的には両親・教師・その他周囲の人）に用紙を配布して記入報告を求めた。

調査項目計 180 について各々、「できる」「できるだけ」「できない」「できないだろう」の 4 段階の評定尺度で日常生活での諸能力について評定してもらった。採点は前 2 者の評定をいずれも 1 問 1 点、後 2 者の評定をいずれも 1 問 0 点とした。得点の総計から社会年齢を換算した。

被験者は盲幼児 63 名、弱視幼児 12 名、正眼幼児 187 名で、年齢範囲は 4 歳から 6 歳までである。それを年齢別、視力別に示すと表 1 のとおりである。

表 1. 年齢別・視力別人数

視力別 \ 年齢	4 歳	5 歳	6 歳	合計
盲 児	19	25	19	63
弱視児	2	7	3	12
正眼児	23	108	56	187

III 結 果

(1) 社会生活能力全般について

表 2 は社会生活能力全般について、年齢別及び視力別に総得点、社会年齢、社会成熟度指数を示したものである。

まず各年齢ごとに社会成熟度指数 (S Q) の平均値を比較すると、盲幼児は S Q 69.5、弱視幼児は S Q 89.6、正眼幼児は S Q 107.1 となり、視覚障害幼児のいずれの

表 2. 年齢別・視力別社会成熟度

年齢	視力別	総得点 (S D)	S Q (S D)	S A
4 歳	盲 児	95.2(40.887)	84.2(42.954)	3:3
	弱視児	145.0(1.414)	89.6(3.202)	5:1
	正眼児	128.4(21.853)	92.8(23.819)	4:3
5 歳	盲 児	113.4(32.978)	69.8(21.408)	3:7
	弱視児	135.0(15.283)	82.0(14.097)	4:5
	正眼児	148.3(19.039)	108.8(34.236)	5:8
6 歳	盲 児	102.1(41.152)	54.6(25.999)	3:5
	弱視児	148.2(22.385)	86.2(47.046)	6:0
	正眼児	155.9(17.890)	109.6(28.072)	6:7

表 3. t-検定表

	盲 児	弱視児	正眼児
盲 児			
弱視児	-2.05* df=73		
正眼児	-8.10*** df=24.8	-1.88 df=197	

*p<.05
***p<.001

※Welch法を用いた

グループも正眼幼児より低い。また視覚障害幼児群の中では盲幼児が弱視幼児より低い。(表 3)

図 1 は S Q の年齢別及び視力別の平均値をプロットしたものである。この図から発達的にみても、どの年齢においても正眼幼児、弱視幼児、盲幼児という順序で社会成熟度指数は低くなっている。

そこで、年齢と視力の二要因が S Q に影響を及ぼしているかをみるために二要因の分散分析を行った。表 4 は年齢と視力による二要因の分散分析の結果である。視力の要因が S Q に有意に作用していること ($F=32.973$ $df=2, 261$ $p<.001$) がわかる。このことから、こうした能力は視力の程度によって影響をうけていることがわ

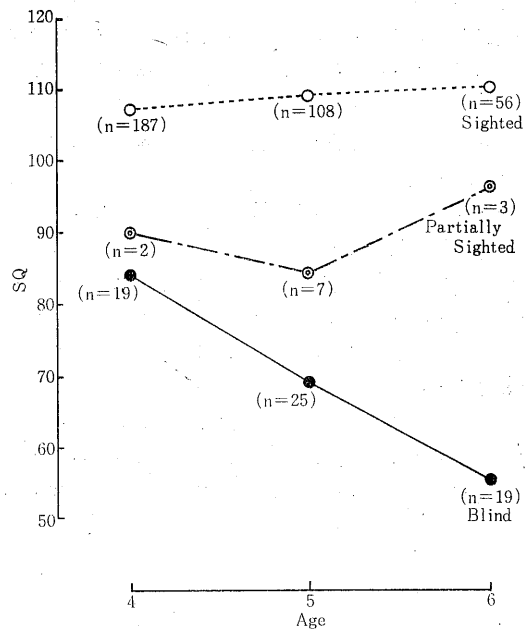


図 1. 年齢別・視力別社会成熟度指数

表 4. 2 要因分散分析表

SOURCE OF VARIATION	SS	df	MS	F
MAIN EFFECTS	67601.498	4	16900.375	17.578***
VA	63403.174	2	31701.587	32.973***
AGE	346.527	2	173.264	0.180
2-WAY INTERACTION	14514.776	4	3628.694	3.774**
EXPLAINED	82116.273	8	10264.534	10.676***
RESIDUAL	243246.863	253	961.450	
TOTAL	325363.137	261	1246.602	

***p<.001, **p<.01

かる。

また各年齢における視覚障害幼児群と正眼幼児群の S Q を比較するために t 検定を行った (t' は Welch 法を用いた)。なお弱視幼児群では調査対象数が少なく、比較資料としての信頼性が低いので比較検討の対象から除いた。

その結果、4 歳児の盲幼児群と正眼幼児群の間 ($t' = -0.78$ $df = 26.89$) では差がみられなかった。5 歳児の盲幼児群と正眼幼児群の間 ($t = -8.10$ $df = 248$ $p < .001$)、6 歳児の盲幼児群と正眼幼児群の間 ($t = -7.52$ $df = 73$ $p < .001$) にいずれも 0.1% 水準で有意な差がみられた。

このことから、4 歳児においては視覚障害幼児と正眼幼児との S Q の差はほとんどみられないが、年齢が増加するにつれて視覚障害幼児の S Q は低くなる傾向がみられた。

(2) 社会生活能力の下位能力について

つぎに社会生活能力の下位能力について比較検討を行

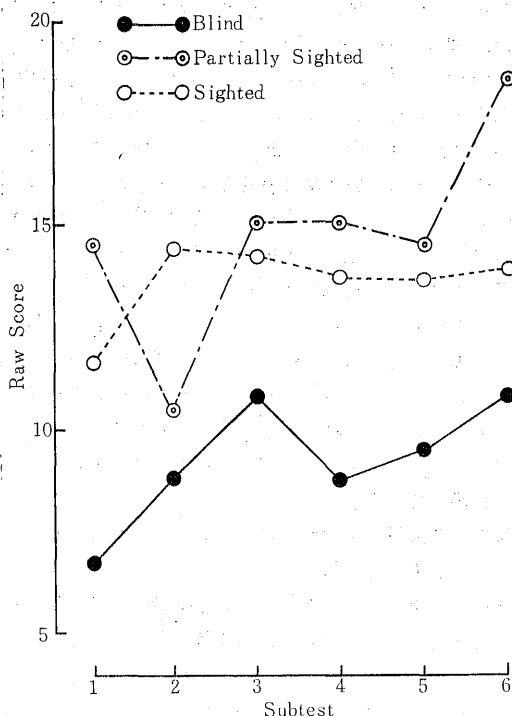


図 2. 4 歳児の社会生活能力の下位能力

った。表 5 は年齢別及び視力別に下位能力についてまとめたものである。弱視幼児は調査対象数が少ないので参考程度にとどめた。

図 2 は 4 歳児の視力別の各下位能力の平均得点をプロットしたものである。

全般的にみて盲幼児は各下位能力毎に正眼幼児より低

表 5. 社会生活能力の下位能力の得点比較表

年 齢	4 歳			5 歳			6 歳				
	視 力	盲	弱 視	正 眼	盲	弱 視	正 眼	盲	弱 視	正 眼	
第 一 部 社 会 生 活 能 力	1. 仕事の能力	Mean	6.868	14.500	11.609	7.880	12.429	14.721	7.053	10.667	16.732
		SD	5.620	2.121	3.912	5.114	2.589	3.832	5.899	5.132	2.865
	2. からだのこなし	Mean	8.947	10.500	14.413	9.860	13.286	16.102	8.632	13.500	17.152
		SD	4.816	0.707	2.004	3.463	1.955	2.455	3.353	4.822	2.060
	3. こ と ば	Mean	10.921	15.000	14.109	12.320	15.929	16.102	11.579	15.833	17.893
		SD	5.463	1.414	2.697	4.703	2.281	2.761	4.042	4.856	1.993
4. 集団への参加	Mean	8.789	15.000	13.739	10.760	15.143	16.398	10.211	16.333	17.699	
	SD	6.341	2.828	4.090	5.242	4.049	3.063	6.143	3.512	2.536	
5. 自発性(自主性)	Mean	9.500	14.500	13.652	11.740	12.643	16.125	10.395	18.167	17.045	
	SD	5.326	3.536	2.656	5.146	3.955	3.163	6.304	1.607	2.894	
6. 自己統制	Mean	10.974	18.500	13.913	15.100	13.571	15.782	13.500	16.833	16.366	
	SD	5.221	2.121	4.376	3.838	3.845	3.561	4.802	3.253	3.217	

いことがわかる。特に低い下位能力はからだのこなしで 0.1%水準で有意な差がみられた。 $(t'=-4.63 \text{ } df=23.13 \text{ } p<.001)$ また仕事の能力 $(t'=-3.13 \text{ } df=40 \text{ } p<.01)$, 集団への参加 $(t'=-3.06 \text{ } df=40 \text{ } p<.01)$, 自発性(自主性) $(t'=-3.28 \text{ } df=40 \text{ } p<.01)$ の4つの下位能力では1%水準で有意な差がみられ, ことばの下位能力 $(t'=-2.32 \text{ } df=25.14 \text{ } p<.05)$ は5%水準で差がみられた。自己統制の下位能力 $(t'=-1.99 \text{ } df=40)$ においては有意な差がみられなかった。

以上の結果から, からだのこなし, 仕事の能力, 集団への参加, 自発性(自主性)の4つの領域のうち, 4歳児ではとくにからだのこなしの下位能力に視力の程度による著しい差が現われ, ことばの下位能力では差がわずかになり, 自己統制の下位能力では正眼幼児と差がないことを示している。

図3は5歳児の視力別の各下位能力の平均得点をプロットしたものである。

5歳児の場合にも同様に盲幼児は全般的に低い得点を示した。とくに正眼幼児に比べて低い下位能力は仕事の能力 $(t'=6.29 \text{ } df=30.53 \text{ } p<.001)$, からだのこなし $(t'=-8.53 \text{ } df=29.82 \text{ } p<.001)$, ことば $(t'=-4.11$

$df=27.94 \text{ } p<.001)$, 集団への参加 $(t'=-5.18 \text{ } df=27.90 \text{ } p<.001)$, 自発性(自主性) $(t'=-4.09 \text{ } df=28.33 \text{ } p<.001)$ の5つの下位能力で, 0.1%水準で有意な差がみられた。自己統制の下位能力 $(t'=-0.85 \text{ } df=131)$ では4歳児と同様に差はみられなかった。5歳児においては仕事の能力, からだのこなし, ことば, 集団への参加, 自発性(自主性)の5領域において盲幼児は著しく低い得点を示し, 視覚障害の影響は社会性全体の能力に及んでいることになる。自己統制の領域においては正眼幼児と有意な差はない。

図4は6歳児の視力別の各下位能力の平均得点をプロットしたものである。盲幼児はいずれの下位能力においても低い得点であることがわかる。仕事の能力 $(t'=-6.88 \text{ } df=20.95 \text{ } p<.001)$, からだのこなし $(t'=-10.43 \text{ } df=22.78 \text{ } p<.001)$, ことば $(t'=-6.54 \text{ } df=21.04 \text{ } p<.001)$, 集団への参加 $(t'=-5.15 \text{ } df=20.12 \text{ } p<.001)$, 自発性(自主性) $(t'=-4.44 \text{ } df=20.63 \text{ } p<.001)$ の各下位能力ではいずれにおいても0.1%水準で有意な差があった。また自己統制の下位能力 $(t'=-2.42 \text{ } df=23.72 \text{ } p<.05)$ にも5%水準で有意な差がみられた。

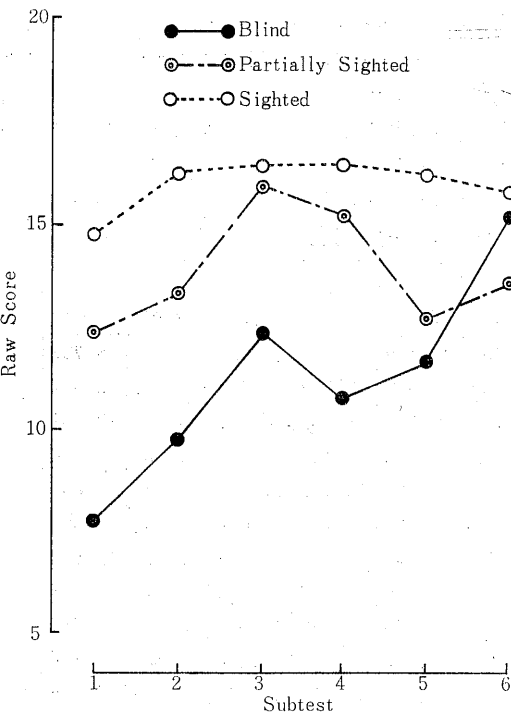


図3. 5歳児の社会生活能力の下位能力

以上各年齢ごとに視力別に比較検討を行ってきたが, 発達の各下位能力を眺めてみると, 正眼幼児の場合には仕事の能力, からだのこなし, ことば, 集団への参加, 自発性(自主性), 自己統制の6領域において発達傾向がみられた。盲幼児では仕事の能力, からだのこなし, ことば, 集団への参加, 自発性(自主性), 自己統制のいずれの領域においても年齢による発達の傾向は認められず, 仕事の能力, からだのこなし, ことば, 集団への参加, 自発性(自主性)の領域では年齢が増加するにつれて正眼幼児との差が著しく広がっている。自己統制の領域においては4歳, 5歳ごろまでは差がみられないが, 6歳になると前述の5領域ほどではないが, 有意な差がみられた。

(3) 基本的生活習慣の下位能力について

基本的生活習慣の各下位能力について年齢別, 視力別にまとめたのが表6である。弱視幼児の場合には調査対象数が少ないので参考程度にした。

図5(4歳児), 6(5歳児), 7(6歳児)は視力別による基本的生活習慣の各下位能力の平均得点をプロットしたものである。

4歳児では, 盲幼児は正眼幼児に比べて, 清潔 $(t'=-2.52 \text{ } df=27.89 \text{ } p<.05)$, 着衣 $(t'=-$

表 6. 基本的習慣の下位能力の得点比較表

年 齢		4 歳			5 歳			6 歳			
視 力		盲	弱 視	正 眼	盲	弱 視	正 眼	盲	弱 視	正 眼	
第二部 基本的 習慣	7. a. 清潔	Mean	6.211	9.500	8.000	7.280	7.929	8.708	7.316	9.000	9.170
		SD	2.725	0.707	1.603	2.638	1.766	1.283	3.215	1.000	0.988
	b. 排泄	Mean	7.500	9.500	8.761	8.520	9.000	9.361	7.237	9.667	9.768
		SD	2.814	0.707	1.214	2.422	0.764	1.160	2.771	0.577	0.504
	8. a. 着衣	Mean	5.684	9.500	8.304	7.620	9.429	8.304	6.447	9.667	9.491
		SD	3.110	0.707	1.295	2.984	0.787	1.187	3.378	0.577	0.806
b. 睡眠	Mean	7.632	9.500	7.543	8.340	8.786	8.514	8.132	9.667	8.795	
	SD	1.957	0.707	1.406	1.784	0.699	1.428	2.191	0.577	1.194	
9. 食事	Mean	11.684	15.000	14.457	13.940	17.000	16.804	12.632	18.833	17.268	
	SD	4.432	7.071	2.531	3.199	1.936	2.657	4.873	1.041	2.573	

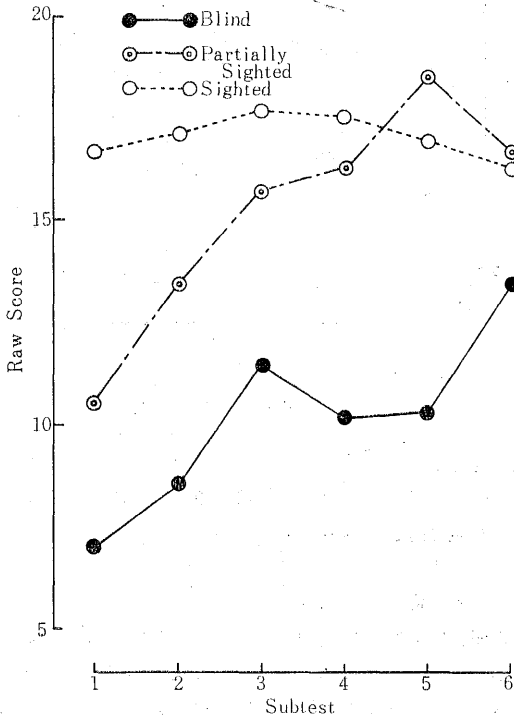


図 4. 6 歳児の社会生活能力の下位能力

-3.43 $df=23.13$ $p<.01$), 食事 ($t'=-2.42$ $df=27.38$ $p<.05$) の3つの領域で有意な差がみられた。排泄 ($t'=-1.82$ $df=23.51$) と睡眠 ($t'=0.16$ $df=31.87$) の領域では正眼幼児と盲幼児群の間に差がみられない領域であることがわかる。それに対して食事の領域では視覚障害の影響がみられる。

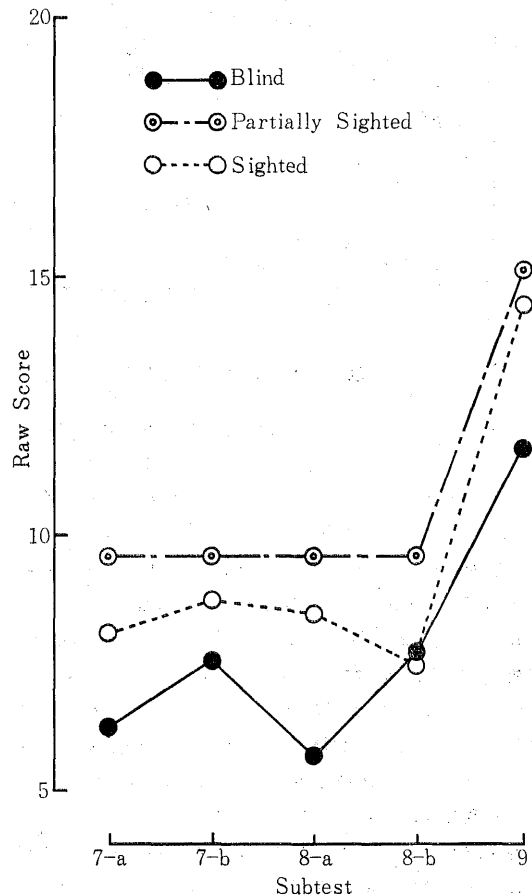


図 5. 4 歳児の基本的習慣の下位能力

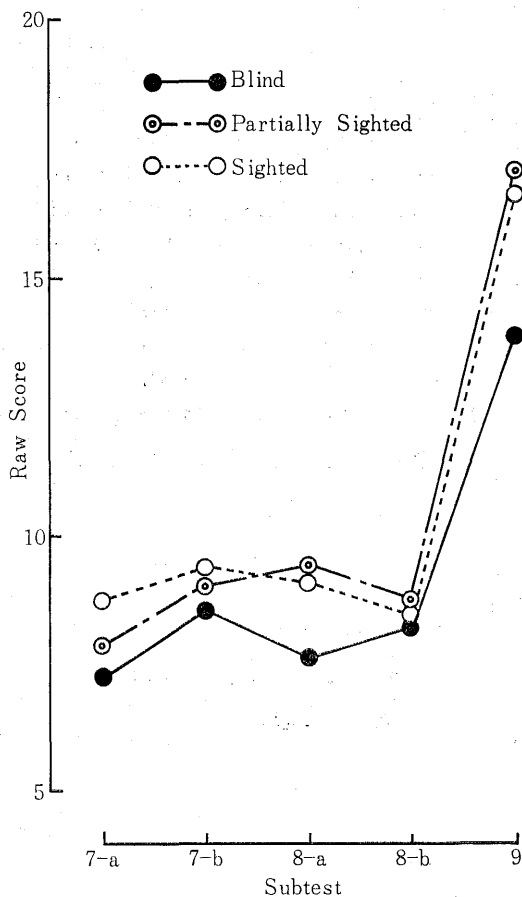


図 6. 5歳児の基本的習慣の下位能力

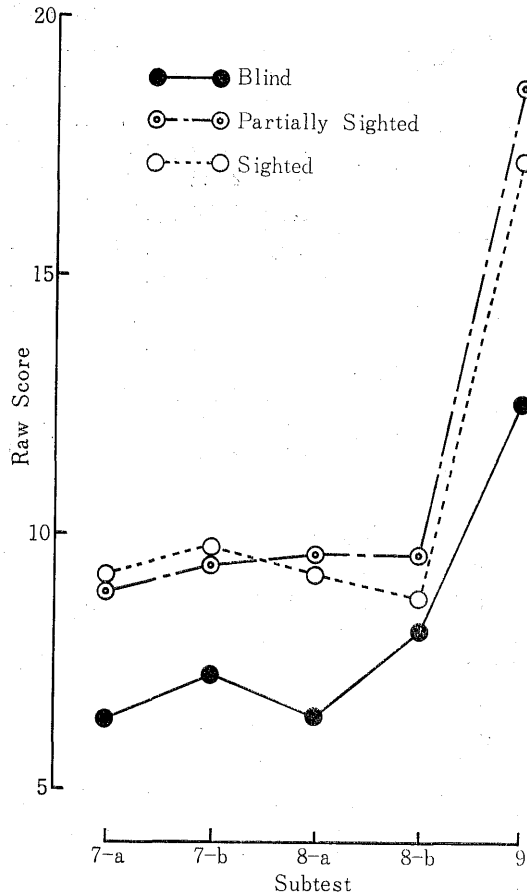


図 7. 6歳児の基本的習慣の下位能力

5歳児でも清潔 ($t' = -2.64$ $df = 26.68$ $p < .05$), 着衣 ($t' = -2.67$ $df = 25.78$ $p < .05$), 食事 ($t' = -4.16$ $df = 32.09$ $p < .001$) の3つの領域で有意な差がみられ、特に食事の領域において著しく低い得点を示した。排泄 ($t' = -1.69$ $df = 26.60$) と睡眠 ($t' = -0.45$ $df = 31.50$) の領域では有意な差がみられなかった。

6歳児では清潔 ($t' = -3.81$ $df = 18.41$ $p < .001$), 排泄 ($t' = -3.96$ $df = 18.41$ $p < .001$), 着衣 ($t' = -3.89$ $df = 18.70$ $p < .001$), 食事 ($t' = -3.96$ $df = 21.50$ $p < .001$) の領域で、いずれも0.1%水準で有意な差がみられた。睡眠の領域 ($t' = -1.26$ $df = 21.74$) では有意な差はみられなかった。

各年齢を通じて清潔と食事の2領域ではいずれの年齢においても盲幼児の正眼幼児に比べて劣っており、視力の影響が著しく及ぶ領域であると考えられる。また年齢が増加するにつれて、着衣、排泄の2領域において盲幼

児に発達のおくれが著しくなり、6歳児ではその差がさらに広がる傾向にある。各年齢を通じて正眼幼児と変わらない領域は睡眠の領域であった。

IV 考察

本研究での視覚障害幼児の社会成熟度指数は、正眼幼児107.1に対して盲幼児69.5、弱視幼児84.9という結果が得られた。調査方法及び対象年齢に違いがあるが、佐藤(1959)の報告では盲児63.8、弱視児84.1であった。今回の調査結果もほぼ同じ値を示した。したがって正眼児のS.Q100に対して盲児では30~35、弱視児では15前後遅れていることになる。正眼児の場合には、社会生活に必要な準備は3歳頃までに家庭を中心として完成し、やがて外部との接触によって、生活空間が拡大するとともに高度の生活能力が身についてくるものである。(橋本 et al. 1967)

視覚障害児とくに盲児の場合には眼が見えないために社会と接触する機会が著しく制限されていたり、自由に歩き回る能力が制限されていたりする。正眼児に比べて盲児は行動が不自由で、不活発である。自由にひとり歩きができないこと、いわば歩行能力の制限は、つねに母親につきそってもらおうとか、他人への依存が高くなり、これが依頼心を高める結果になる。歩行の制限は外出の機会を少なくし、経験不足をまねくことになる。また他人との接触の機会をへらし、社会性の発達に悪影響をもたらすと考えられる。とくに幼児期にあっては隣近所の子どもと遊ぶことはほとんどなく、一日中母親と一緒に、家族と遊ぶケースが多く、そのために社会生活の学習機会が乏しく、社会性の発達が遅れることになる。

次に視覚障害による影響が社会生活能力のどの領域にみられるかを下位能力別に分析した結果から、盲幼児が劣っている領域は、仕事の能力、からだのこなし、ことば、集団への参加、自発性(自主性)の5領域であった。社会生活能力の下位能力は全部で6領域あるので、社会生活能力のほぼ全領域にわたって視覚障害の影響がみられることになる。

これらの5領域(仕事の能力、からだのこなし、ことば、集団への参加、自発性(自主性))のうち、とくにからだのこなしの領域においては各年齢(4~6歳)で、いずれも著しく劣っていた。いわゆる眼の見えない盲幼児にとって歩行能力(移動)が制限されているために運動能力面のみならず、社会生活能力、とくにからだのこなしの領域に視覚障害の影響の一端をみることができよう。仕事の能力、ことば、集団への参加、自発性(自主性)の4領域では6歳になると正眼幼児との差が著しくなるが、佐藤(1959)は7歳以降では年齢が増加するにつれて、ことば、集団への参加、自発性(自主性)の3領域においては正眼児との差がみられなくなると報告している。盲学校に入学した後は、集団生活の機会も多くなり、そのため社会生活に必要な能力が助長され正眼児との差が少なくなるのであろう。したがって盲幼児の社会性の発達を助長させるには、社会の中のいろいろな場面において可能な限り積極的に、盲幼児にある役割りを果たすように働きかけることは極めて重要なことである。それはまた、子どもの好奇心を満たすであろうし、大切な情報源でもある。また子ども自身が外部に対して自己を表出する機会であると同時に、外部の人々がその子どもを理解するための窓口ともなる。こういった体験の積み重ねを通じて盲幼児の社会的経験が拡大され、社会生活能力が助長されていくことになる。また自分

一人で、いろいろな場面に応じることができるようになり、両親に依存する度も少なくなっていくものである(五十嵐 1973)。

最後に基本的生活習慣では社会生活能力ほどの遅れはみられないが、清潔、排泄、着衣、食事の領域ではいずれも盲幼児は正眼幼児に比べて得点が低かった。とくに食事の領域では著しく低く、視覚障害の影響を受けることを指摘することができる。睡眠の領域では正眼幼児と変わらない。

基本的生活習慣においても視覚障害の影響が随所にみられ、盲幼児には視覚障害を補う適切な身辺自立指導が必要となろう。

五十嵐(1972)は身辺自立指導の一般原則として、①発達時期に合わせること、②くり返し指導すること、③一貫性をもたせること、④手本を示すこと、⑤具体的であること、⑥自発性を重んじることの6つの原則をあげている。盲幼児の場合には身辺処理を自分からおこなうということが少ないので、適切な時期を見つけて身辺自立の指導を開始することが望まれる。また盲幼児の身辺自立指導も正眼児と全く同じ目標をもつものであり、それと同時に盲幼児が視覚障害ゆえの種々の障害に対処するためには、内容や指導法に工夫や変更が必要であろう。

文 献

- 1) Bradway, K. P. Social Competence of Exceptional Children; The Deaf, the Blind, and the Crippled. *J. Except. Child.*, 4: 64-69, 1937.
- 2) Doll, E. A. Vineland Social Maturity Scale., 1947.
- 3) Doll, E. A. Measurement of Social Competence; A Manual for the Vineland Social Maturity Scale., 1953.
- 4) 橋本重治, 松原達哉 脳性麻痺児の社会的成熟度に関する研究 東京教育大学教育学部紀要, 13: 169-185, 1967.
- 5) 五十嵐信敬・他 盲幼児の身辺処理能力の発達とその指導 盲幼児発達指導研究会, 1972.
- 6) 五十嵐信敬・他 盲幼児の社会的発達とその指導 盲幼児発達指導研究会, 1973.
- 7) 松原達哉 社会的成熟度の発達と形成要因に関する研究 教育心理学研究, 12: 152-165, 1964.
- 8) Maxfield, K. E., & Fjeld, H. A. The Social Maturity of the Visually Handicapped Preschool Child., *Child Develop.*, 13: 1-27, 1942.

- 9) McKay, B.E. Social Maturity of the Preschool Blind Child., Training School Bull., 33 : 146-155, 1936.
- 10) 佐藤泰正 視覚障害児用ヴァインランド社会成熟度検査について 児童心理と精神衛生, 30 : 482-490, 1956.
- 11) 佐藤泰正 盲児・弱視児の社会性の発達について 東京教育大学教育学部紀要, 5 : 102-126, 1959.
- 12) 佐藤泰正 視覚障害児の心理学 学芸図書, 1974.
- 13) 鈴木清 社会成熟度診断検査 日本文化科学社, 1961

Summary

Social Development of Visually Handicapped Children

Kazuyoshi Saito, Hideo Nakata and Yasumasa Sato

The purpose of this study is to clarify the characteristics of social maturity of visually handicapped children. A form of questionnaire was used which contained 180 items referring to social maturity. These items were grouped into those 11 aspects on "Social competence," (Occupation, Locomotion, Communication, Socialization, Spontaneity, and Self-control) and "Fundamental habits," (Cleanliness, Toilet Habits, Dressing, Sleeping, and Feeding).

Subjects were from 4 to 6 in age and classified in 63 blind, 12 partially sighted, and 187 sighted children.

The results were as follows ;

(1) The average SQ of blind and partially sighted children were 67.5 and 87.6, respectively and that of the sighted was 107.1. So that, visually handicapped children were inferior to the sighted.

(2) Blind children showed lower score than the sighted in those five items on Occupation, Locomotion, Communication, Socialization, and Spontaneity. In Self-control, no significant difference was found between blind and sighted children.

(3) In Sleeping habits blind children were more than the sighted, but showed marked delay in establishment of the habits of cleanliness, toilet habits, dressing and feeding themselves. There was no significant difference between blind and sighted children in sleeping habits.